

日本伝統音楽の技を体験する：名手による箏と小鼓

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子, 大槻, 寛 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7170

日本伝統音楽の技を体験する

—名手による箏と小鼓—

音楽教育講座 小西 潤子 大槻 寛

1. 文科省が進める和楽器演奏実践の明確化

平成 14 (2002) 年度より、和楽器の演奏指導が小・中学校で実施されるようになった。多くの音楽科教員が西洋音楽のみを学んできたため、手にしたことのない箏や三味線の指導に戸惑ったことは想像に難くない。その後、7年を経て現場でもそれなりの対応ができるノウハウが蓄積されてきたものと思われる。ホームページに公示されている平成 20 年 6 月の文部科学省『小学校学習指導要領解説』では、改善の具体的事項として「唱歌や民謡、郷土に伝わるうたについて、さらに取り上げられるようにする」とある。さらに、平成 20 年 7 月の『中学校学習指導要領解説』では「我が国の伝統文化に関する学習を充実する観点から、和楽器については、簡単な曲の表現を通して、伝統音楽のよさを一層味わうことができるようにするとともに、我が国の伝統的な歌唱の指導も重視するようにする。また、我が国の音楽文化に親しみ一層の愛着をもつ観点から、我が国の自然や四季、文化、日本語のもつ美しさなどを味わうことのできる歌曲を更に取り上げるようにする。」と明記されている。その上で、「従前の『和楽器については、3 学年間を通じて 1 種類以上の楽器を用いること』を踏襲しつつ、伝統や文化の教育を充実する観点から、『表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること』を新たに示し、器楽の指導において和楽器を用いる趣旨を明らかにした。」と和楽器を取り扱う趣旨の明確化を行っている。

2. 箏の需要とメンテナンスの必要性

静岡大学教育学部附属学校をはじめ音楽科卒業生が勤務する学校からは、児童生徒の指導目的や研究授業のために音楽教育講座が保有する箏を一時的に借用したいという申し出がくる。しかしながら、メンテナンスをしないと糸が切れてしまうなどして楽器としての有用性を保つことができない。そこで、本年度は保有する 14 面のうち 11 面について「糸の天地入れ替え」を行った。このように大学保有の楽器への需要が高まる一方で、大学側の予算削減に伴い、学生が和楽器演奏体験をする機会が失われつつあるのが現状である。



写真 1 演奏に挑戦する



写真 2 箏のメンテナンスに挑戦する

平成 20 (2008) 年度は、幸い安藤正輝講師による日本音楽の集中講義を 2009 年 1 月 6 日 (火)、7 日 (水)、10 日 (土) に開講することができた (写真 1、2、3)。3 日間の集中講義で、半年分の「技」を身につけるのは並大抵ではない。講師の熱心な指導と学生の努力により、毎年《さくら》や《六段の調べ》、《春の海》の一部が演奏できるまでのレベルに到達する。

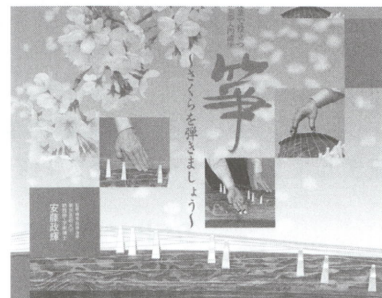


写真 3 安藤講師監修のビデオ教材

3. 小鼓の演奏体験—グランシップ「出前事業」との連携—

現状を改善して音楽科学生に和楽器演奏体験の場を増やしたいと考えていたところ、(財)静岡県文化財団より願ってもない申し出があった。それは、グランシップの「出前事業」として、学内で大倉流小鼓方家元・大倉源次郎氏による小鼓演奏ワークショップを開催しないか、というものであった。同財団には、毎年学芸員資格取得のための科目である文化芸術事業実習受講生を受け入れていただき、連携を蓄積してきた。こちら側は場所と受講生を確保するだけで、重要無形文化財総合指定保持者によるワークショップを学生が体験できるのである。これがどれほどのすばらしい機会であるかを伝えきれないほどの気持であった。



写真4 大倉源次郎講師からの説明

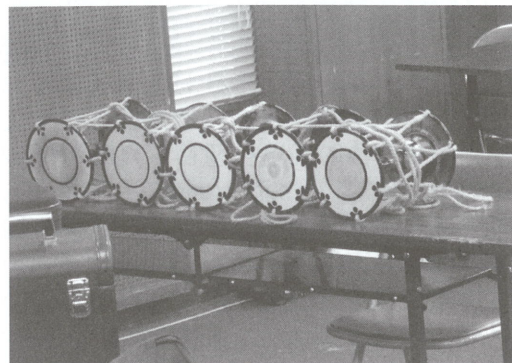


写真5 江戸時代からの貴重な小鼓



写真6 模範演奏を聴いてのエア鼓



写真7 貴重な小鼓を打つ

先方から1月26日(月)14:30開始という日時指定があつての事業であつたため、受講生は月曜日の7・8限の作曲法(担当は大槻寛教授)受講生(1年生)とした。私の側から「一生に一度の体験」と強調したこともあつて、学生たちも真剣な表情を見せていた。初めての「出前事業」受け入れということと、講師が特別であることから、財団側からは田村孝子館長をはじめ計4人のスタッフが対応した。学生たちが小鼓を演奏するのを見て、スタッフの一人は「われわれでも小鼓が入ったカバンすらもたせてもらえないのに」と話していた。

このような素晴らしい事業との連携が、いつも可能になるわけではない。しかしながら、よりよい学生教育に向けて日常的にアンテナを張り巡らせることで情報を得て、チャンスがあれば活かせるようにしていきたい。それとともに、学生が地域の一員としての自覚を持ち、グランシップのような公共施設の事業に積極的に参加協力していくための支援を教員として引き続きしていきたいと考えている。